

もふもふ大好き家族が聖女召喚に巻き込まれる3

く時空神様からの気まぐれギフト・スキル『ルーム』で家族と愛犬守りますく



晃太

優衣の弟。日本では
私鉄の運転手として
働いていた。

龍太

優衣と晃太の父親。
日本では業務用台所の
設計をしていた。

花

水澤家の愛犬。

景子

優衣と晃太の母親。
水澤家の家事を一手に担う。

ビアンカ

フォレストガーディアンウルフ。
優衣と従魔契約を結んでいる。

水澤優衣

聖女召喚に巻き込まれて
家族そろって異世界に
飛ばされてしまった水澤家の長女。
日本では看護師として働いていた。

ルージュ

クリムゾンジャガー。
優衣と従魔契約を
結んでいる。

❧ CHARACTERS ❧

序章

アルブレンの街のマルシェを、私——水澤優衣^{みずさわ ゆい}、そしてビアンカとルージュが通ると、皆さん
気さくに声をかけてくれる。それがとても心地いい。

ビアンカは『魔の森の守護者』と呼ばれるフォレストガーディアンウルフで、ルージュは通った
あとは血の道ができると言われるクリムゾンジャガー。大きくて迫力があるせいか、はじめは怖い
とか、大丈夫なのあれ？ みたいな視線だったけどね。

この街で過ごしているうちに、ビアンカとルージュがとても賢く、無闇^{むやみ}に牙を剥いたりしないと
わかってくれたんやろうね。

いつものウサギ肉の屋台で買い物。ビアンカとルージュが「食べたいのですー」、「食べたい
わー」と訴えるので、あるだけ全部購入する。

他の買い物も済ませて、宿への帰り道、これまでのことを思い出していた。

私達——水澤一家は現在、大国ユリアレーナにいるが……数ヶ月前には、ここから西にあるディ
レナスという国にいた。その国の王子がおこなった『聖女召喚』に巻き込まれたのだ、愛犬・花と
ともに。

いわゆる異世界召喚ってやつね。

私達を召喚した王子に思うところはあんだけど、ディレナスにもいい人はいたし、いろんな人にお世話になった。

私が働かせてもらった治療院、護衛のディードリアンさん、イーリスさん、偉い立場にありながらも私達に配慮してくれたヒュルトさん。

それでもディレナスを出ようと思ったのは、ディレナスの「種族」に対しての考え方になじめなかったから。人族至上主義で、他種族は扱いに差があった。そして、ディレナスを出た最大の理由は、『聖女』として私達と一緒に召喚された華憐だ。彼女がなにかやらかして、私達にその責任を押し付けないかという不安があった。なんといっても、華憐には日本にいた時から散々な目にあわされてきたので。

——はじめは不安だったけど、思い切ってディレナスを出て良かったと思っている。

移動中に護衛をしてくれた冒険者パーティ『鷹の目』の皆さんはいい方達だったし。なにより旅の途中でビアンカとルージュ、そしてかわいか仔達に出会えたからね。

いろいろあって、私がビアンカやルージュ達の主人として、契約をした。これでビアンカとルージュ達は私の従魔つてことになるが、実際は私達水澤家の家族として迎え入れた感じ。冒険者資格だつてビアンカとルージュ達と一緒にいるために取った。

……火を吐く亀やデッカイ猪、先日の緑——ゴブリンの巣やシロクロのヒビなどに遭遇したところなどは、記憶の向こうに押しやる。

だつて——

『ユイ、お腹減ったのです』

『私もよ。今日はなにを食べさせてくれるの？』

きゅるん、とお目々キラキラで訴えてくる姿がかわいか。

魔の森の守護者、フォレストガーディアンウルフのビアンカ。通ったあとは血の道となるクリムゾンジャガーのルージュ。どちらも恐ろしい魔物なんだつて。

でもね。こんなふうにお目々キラキラで聞いてくるんやもん。ちよつとサイズがデッカイだけで全然怖くなか。仔達だつて、みんなかわいか。いつまでも眺めて、もふもふしていられる。私が形式上契約とかしたけど、ビアンカとルージュ、五匹の仔達は私達水澤家の大事な家族や。

「きつと、お母さんがいっぱい作ってくれとるよ」

『早く帰るのです』

『帰りましょう』

きゅるん。

ふふふ、かわいか。

「そうやね。帰ろうかね」

第一章 マーファ

修繕・改修を頼んでいた馬車が完成したという連絡が来たので、私と弟の晃太で受け取りに行くことにした。ビアンカとルージュ、そしてその五匹の仔達も一緒だ。

「内部を確認してくれ」

早速馬車職人のカルロさんが馬車のドアを開ける。

中は座席がなくなり、以前の倍以上広くなった感じた。段差もないし、ピカピカ。木のいい匂いがする。

「丈夫なトレント材を使用しているから、少々のことではびくともしないぞ」

「はい、ありがとうございます」

問題なさそうだ。私は残りの料金を支払う。

ビアンカの第一子、元気が職人さん達にじゃれついている。第二子ルリと第三子クリスはビアンカにぴったり。ルージュの子のコハクとヒスイは馬車が気に入ったのか、中に入ったまま出てこない。

カルロさんをはじめとする職人さん達に、もう一度お礼を言う。

「いやいや、いい仕事させてもらったよ」

「あの、もし付与に問題が出た時は、どこに行けばいいですか？」

そう、この馬車には衝撃吸収の付与が付いているらしい。それになにかあった時、どうしたらいいかわからない。

「衝撃吸収なら、ここでもできる。あと、車輪と車軸、床板に物理防御が付与されているな。更に付与をするとしたら、馬車全体にかける自動修復か重量軽減くらいだ。ただ、これだけの重量だ。かけることができる付与師は、王都にしかないはずだ」

「重量軽減ですか。重さが軽くなるんですか？」

「そうだな。まあ、羽根のようにってわけじゃないがな。ランクの低いものと、一割減くらいだな」

「一割」

考える。少しでも軽いほうが、馬車を牽くノワールにはいいはずだ。

なら、マーファの次は王都に向かうかな。

「アルブレンと同等の規模の街なら、付与師がいるはずだから、一般的な付与なら大丈夫だろう。もちろん、うちでもできるから、いつでも来てくれ。ただ、料金がかかるからな」

カルロさんが、きらりと営業スマイル。

「ありがとうございます、では、なにかあれば頼らせていただきます」

「いつでも来てくれ。おうおう、お前はかわいいなあ」

元気がカルロさんに飛びかかる。

「わんっ」

「こら、元氣」

「いい、いい。そうかゲンキか、いい名前だな」

カルロさんは元氣をもふもふ。良かった、毎日ブラッシングをしておいて。

馬車の中の匂いを嗅いでいるコハクとヒスイを回収。馬車を晃太のアイテムボックスに入れる。最後にもう一度お礼を言っ、私達は工房をあとにした。

次の日。

ノワールを馬車に繋いだ。自分達の馬車を持つのは初めてで繋ぎ方がわからなかった、ギルドで教わったとおりに。一応手綱は握るが、ビアンカとルージュが先導してくれるというので形だけだ。

警備兵のバラダーさんが街の門にいて、見送ってくれた。

「ミズサワさん。いつでもアルブレンに帰ってきてください」

「はい、ありがとうございます」

私と晃太がぺこり。

父と母も挨拶していた。バラダーさんは、私達が借りていたログハウスの周辺を警邏してくれていたからね。

馭者台に座る。高い、足が微妙に届かない。乗る、じゃなくて、よじのぼるみたいになった。

ノワールが少しでも楽に走れるように、晃太が支援魔法をかける。
マーファはここから東。魔法馬が牽く馬車で約二十日だ。
「今日はこの結界石まで、移動やね」
「そやな」

晃太がギルドで貰った地図を広げる。私は地図が読めない女なので、こういうことは晃太に任せている。

結界石の周囲には魔物が近寄ってこないそうなので、旅をする人はだいたいそこで野宿をする。

『結界石までなのですか？』

『あんなものより、私の光魔法のほうが強力よ』

ビアンカとルージュが言う。

おお、頼りになる。

『だから、できるだけ進むのです』

『そうね。いいわよね、ユイ？』

「それはいいけど、ノワール、大丈夫なん？ 無理さそうで、馬車ば牽いているんばい」

『大丈夫なですよね？』

「ブヒヒン」

『ついてきなさい、ノワール。行きましょう』

そして、ビアンカとルージュが発進する。ノワールも発進。

「うわあああああああああッ」

とんでもないスピードで。

三匹を必死で止めたあと、私と晃太は馭者台ぎょしゃだいのベルトを外し、だらりと崩れ落ちる。本当にベルトがあつて助かった。なかったら落ちていたよ。

『大丈夫なのですか？』

『どうしたのユイ、コウタ？』

「ブヒヒン」

声が出ない。

スピードが出る。つまり、馭者台ぎょしゃだいに座る私達にも当然、圧がかかる。風圧がね。今日はしかも向かい風だから、特に。

あれだ、バラエティ番組とかで見る、大きな扇風機を当てられっぱなしな感じだ。目が開けられない、息がしにくい。

座り込み、なんとか息を整える。

「あのさ、ビアンカさん、ルージュさん、もうちょっとね、スピード落してもらえんかね？ 私らじゃ、あれは耐えきらんよ」

『そうなのですか？ ごめんなのです』

『少し張り切りすぎたかしら？ 気をつけるわ』

「ブヒヒン」

水分補給し、少し落ち着いてから、車輪を確認。大丈夫みたいだ。それから馬車の中で、神様に貰ったスキル『ルーム』を使う。

ルームの出入口となる扉は亜空間に繋がり、スキル保有者である私にしか開閉できない。ルームの中は、私達が日本で住んでいた家の中みたいな空間になっていて、外界の影響を受けないし、生命体を入れたまま移動することも可能だ。高齢の両親もいる私達にとって、欠くことのできないスキルとなっている。

「大丈夫ね？ なんかなりスピードが出とったみたいやけど」
ルームの中にいた母が、真っ先に心配して聞いてきた。

お昼寝中だったのか、花はクッションで寝たまま尻尾しっぽを振ってる。元氣達は中庭だ。

「実はね、風圧がね」

説明すると、ああ、みたいな顔になる。

「なら、ヘルメットは？」

「なかよ、『ディレックス』では手に入らんし」

スキル『異世界への扉』を使えば、私達が日本にいる時によく使っていたお店で買い物ができるけれど、今行ける店にヘルメットは置いてなかったはずだ。

「そうなあ。どうする？」

「スピードを落としてもらうよ」

その後トイレ休憩を取り、ルームを出る前に、ふと思いつく。

「なあ、晃太、あんたの支援魔法で風の防御支援とかできん？」

「あ、そやなあ、やってみるかね？」

晃太が悩んで、魔法発動。

よくわからないけど、大丈夫かな？

「なあ、お母さん、確か遮断って魔法がなかったね？」

父が思い出したように言う。

「当たる風だけ、遮断できんかね？ ほら、ヘルメットのガラスの部分みたいに」

なるほど、いいかも。

考え考え、母が遮断を発動する。

「姉ちゃん、まずゆっくり走ってもらったら？」

「そやね。ねえ、ノワールにいつも馬車を牽く速度で走ってもらえるか、伝えてくれん？」

『わかったのです、ノワール、わかったのですか？』

「ブヒヒン」

『大丈夫よ』

「まず、ゆっくり行つて。それからスピード上げようかね」

はじめからそうすれば良かった。

ノワールにいつものスピードで走ってもらい、徐々に速度を上げていく。

途中、集団で移動している馬車に追いつく。ビアンカとルージュの姿を見て騒然としていたけど、

大声で「従魔なので大丈夫です」と叫びつつ追い越した。

結界石を二つ無視して進み、暗くなり出したところでやっと止まった。

「この調子なら、マーフアに結構早く着かん？」

「そやな、でもよかやん。ねえ、ルージュ、近くに誰かおる？」

『いないわ』

「なら、馬車をアイテムボックスに入れて、ルームに入ろうかね」

馬車を晃太のアイテムボックスに入れて、ルームのドアを開けた。

てっぺんってー。

【スキル ルーム レベル22にアップしました HP3000追加】

脳内に響くアナウンス。この『ルーム』は、出入りするだけでもレベルアップに繋がる。あと、自身のレベルも作用しているみたい。ナーダリーグリズリーとかいう熊を倒して私がレベルアップした時は、『ルーム』に関連するスキル『異世界への扉』の行き先が増えたと、『異世界のメニュー』というスキルも加わって、とても便利になった。おかげで生活の質を落とすことなく、快適に過ごせている。授けてくださった神様に感謝感謝だ。

「優衣、ご飯の準備手伝って」

ルームで作業していた母に呼ばれる。晃太はノワールを厩舎に誘導。そのノワールの食事を運

ぶ父。

『ユイ、お腹が減ったのです』

『今日はなにが食べられるのかしら？』

期待を込めた目で見てくるビアンカとルージュ。先日、ゴブリンやらヒヒやらをあつという間に殲滅^{せんめつ}するのを見た時は恐ろしいと思ったが、仔達にお乳をあげながら私をきゆるん、と見上げる姿に、どうでも良くなる。だって、かわいかもん。

私はうがい、手洗いをしてから、母の手伝いに入った。

一日の始まり。

起きて真つ先に、従魔の部屋と厩舎^{きゅうしや}の清掃だ。モザイクをかけないといけないものが、転がっているの。たまに寝すごすと、誰かに起こされる。ルーム内でスキルを使うための液晶画面は、基本的に私にしか触れないからだ。

洗面台は一つなので、起きた順番で使う。

並行して朝ご飯の準備だ。お湯を沸かして、ホットプレートに目玉焼きをずらりと並べる。先に洗面を済ませた母がお味噌汁の準備。父は神棚に供えた榊^{さかき}の水をかえる。晃太はお茶を淹^いれ、私はビアンカとルージュのご飯の準備だ。

本日は、ご飯とえのきとワカメの味噌汁、そして目玉焼きだ。ご飯のおともは、私と父は鮭フレーク、晃太は納豆、母は海苔^{のり}。ビアンカとルージュは皿にご飯を盛り、ハム、ホットプレート

で焼いた目玉焼きを盛る。ノワールの野菜や果物は、晃太が切り分ける。

「ビアンカ、ルージュ、醤油^{しやうゆ}？ ケチャップ？」

『醤油^{しやうゆ}がいいのです』

『私はケチャップがいいわ』

「はいはい」

出来上がる頃に起きてくるビアンカとルージュ。花もその頃に起きてくる。

なぜか花は、ついさつきまで一緒に寝ていた母に、お尻を下げて尻尾^{しっぽ}を振って駆け寄る。まるで何日も会ってないみたいに喜びを表している。私達にも、お腹を出して尻尾^{しっぽ}を振る。毎日これかわいかのよ。でれ、になるのよ。ちなみに元氣達は私達のご飯が終わる頃になってやっと起きる。

花の朝ご飯も準備して、と。

朝ご飯を食べる前に、神棚にお供えをする。

本日のお供えは、『もへじ生活』のタンブラーに入れた牛乳にオレンジジュース、個包装になっているバームクーヘンやワッフル、マドレーヌ。味もいろいろだ。プレーン、紅茶、レモン、チョコ、ほうじ茶、抹茶^{matcha}。時空神様から、小さな——まだ子供の神様がいると聞いて、この形式になった。これまでカップだったのがタンブラーになり、お菓子も三人分から、倍の六人分に。最後にリングとバナナを並べる。

木彫りの神像——お地蔵さんそっくりのその前にお供え物を置き、みんなで手を合わせる。

「神様、本日もお見守りください」

父が神様に朝のご挨拶をする。

お見守りください。

目を閉じてお祈りする。

次に目を開けると、お供えは綺麗になくなっている。タンブラーも空だ。

はじめは三日に一回なくなっていたが、時空神様がルームに焼き肉を食べに来てからは、毎日お供えがなくなるようになった。お供えが気に入ってもらえたのだと思っている。

さて、我々も朝ご飯だ。

ビアンカ、ルージュ、ノワールのご飯もセットして。

「いただきます」

朝ご飯の挨拶とともに食べる。花はダイニングキッチンに設置したケージの中で、朝ご飯だ。

食後、私が食器を片付けている間に、母は洗濯、晃太は風呂掃除、父はフローリングを専用の紙を挟んだ掃除道具で拭き上げて、掃除機をかける。『異世界への扉』でスーパードイレックスが開店したのを確認し、買い物をする。

これが終わると、いざ出発。

最適スピードがわかってきたので、順調に進んでいる。

馭者台には私と晃太。馬車のサイドをビアンカとルージュが固めている。

時折すれ違う馬車がいる時は、ビアンカとルージュは前後に移動。ものすごく警戒されるけど、

笑顔でご挨拶するとかおさまる。

母達はルームの中だ。移動中に花や元氣達のブラッシングをしたり、『異世界への扉』を使って買った、あつちの世界の蜂蜜やメープルシロップを瓶に入れ替えてもらったり、刺繍糸や毛糸に巻き付いている紙を外してもらったりしている。こつちの世界で売る時に、不自然にならないようにね。

途中、宿場もあつたけど、結局素通りして進む。

アルブレンを出て一週間。

「この調子なら、明日の早い時間に着かん？」

「そやな、昼前には着くなあ」

本来なら二十日かかるのにね。私達のためにスピードを落としているが、やはりノワールは速い。おそらくアルブレンまでの移動の時の、倍以上のスピードは出ているだろう。おかげで半分の日数になった。

最後の結界石を素通りしてしばらく。ルージュに周囲を確認してもらい、ルームを開ける。

元氣とコハクが飛び出してくる。

「あ、こら」

『いいのです、私達が見てるのです』

『そうね、しばらく走らせるわ』

ピアノカとルージュが見てくれるようだ。花、ルリ、クリス、ヒスイもルームに入ってきた私達に、近寄ってくる。晃太と撫で回し、頬擦りし、ペロペロされて、破顔する。あ、くさか。でも、かわいか。そろそろ元氣達もシャンプーできるかな？ 父に鑑定してもらおうかな。

考えている間に花達も外に出る。晃太がついていく。花は基本臆病なので、新しい場所では、あまり歩き回らない。なので、晃太が抱っこして散歩している。下ろしてもすぐに抱っこ、と足にすがりつく。にもかかわらず外に出たがるのだ。

「じゃあ、晃太頼むね」

「ん」

私はノワールを厩舎に誘導。厩舎までの道に、父がマットを敷いてくれる。ノワールはピアノカ以上に大きいし、蹄があるのもそのままフローリングを歩くと大変なことになる。とはいえ、すでにピアノカやルージュの爪で、フローリングは傷だらけだ。それに蹄の跡もしっかりついている。初回にノワールをルームに入れた時、蹄のことを考えなかったからだ。すぐにマットを買いに走った。

「今日もお疲れさま、ノワール。人参準備するけんね」

「ブヒヒン」

大人しく厩舎に入ったノワールは、人参という言葉に嬉しそうに鼻を鳴らす。

「今日はカレーなん？」

手を洗ったあと、匂いを嗅ぎながらダイニングキッチンに。

「久しぶりに作ったんよ」

母がコンロフル活用で、鍋を火にかけている。

カレーやシチューはいつも私が担当なんだけど、今日は久しぶりに母のカレーだ。

「あれ？ なんか小鍋のカレー、ちよつと違わん？」

三口コンロのうち、小さい五徳の上に載った小鍋のカレーは、他の二つの鍋の中身に比べて色が薄い。具材も小さい。

「小さい神様用たい。甘口やけど、もし、神様がいらんやったら、辛口のルウを混ぜればよしね」

「そうね」

「優衣、ノワールのご飯の準備して」

「はい」

人参、リンゴ、キャベツを準備する。

「呼んできてよか？」

「よかよ。あ、お父さん、あぶないけん、私がするけん」

父がカレーをよそおうとして、母に注意されてる。私は外にいる晃太達を呼ぶ。

『いい匂いなのです』

『本当ね』

「カレーやな」

晃太が花の足拭きをする。私は液晶画面で『従魔の足拭き』をタップ。

一旦従魔の部屋で、仔達にお乳を飲ませてから、ビアンカとルージュが柵を飛び越えてくる。

『お腹が空いたのです』

『たまらない匂いだわ』

「ちよつと待ちい」

ご飯を盛って、カレーをかける。慎重に父と晃太が運ぶ。待つてましたとばかりに食べ始めるビアンカとルージュ。

『んんっ、美味しいのですっ、いくらでも入るのですっ』

『がふがふっ、本当っ、ちよつと辛めだけど、なんて香りがいいのかしらっ』

『『おかわり』』

なくなるの早。洗ったあとみたいに、綺麗に空になった皿を前脚で押し出してくる。最近、エアーお手、エアーおかわりをしなくなってきたよ。

まあ、よかよか、好評みたいやし。

新しくカレーを盛り、やつと我々も夕ご飯だ。

だけど、その前に。

「時空神様、今日はカレーを作りました。小さな神様用もあります。良かったら召し上がってください」

お地藏さんにお祈り。

振り返ると、なんとなく予感していたけど、いました、黒髪のイケメン、時空神様。本日は金髪美女の雨の女神様もいる。そして二人に手を繋がれているのは、三歳ぐらいの真っ赤な髪のかわいか男の子。小さな神様だ。本当に子供だ。花がケージ内で吠える。吠える。

「すまん、どうしても行くって聞かんぞな」

「ごめんなさい、押しかけてしまつて」

すまなそうな表情の、時空神様と雨の女神様。真っ赤な髪の子は興奮気味なのか、小さくジャンプジャンプ。

「いえいえ、大丈夫ですよ」

私が答えると、真っ赤な髪の子はぱつと走って、母にしがみつき、見上げる。

「たべたいっ、たべたいいっ」

ぐわあっ、かわいかああああっ。

「よかよ、すぐに準備するけんね、椅子に座つとつてねえ」

呆気なく陥落し、ルンルンした母が言うのと、真っ赤な髪の子は頷いて、椅子によじ上る。

はいはい、お手伝いしますよ。

「どうぞ、時空神様も雨の女神様も」

「すまん」

「ありがとう」

時空神様と雨の女神様は、椅子に座つてもジャンプしている真っ赤な髪の子をたしな着めている。

「じつと座ってる」

「落ちるわよ」

「なんか、家族の図だね。」

「あの、こちらの神様は？」

「ああ、こいつは魔法の三柱神で、右の魔法神と呼ばれている。火と土、光の管理者だな」

「三柱ってことは、他にも」

「左と真ん中がいる。髪の毛の色が違うだけで、みんな同じ顔だ」

「三つ子っ」

見てみたいっ。揃ったところをばしゃばしゃ写真撮りたいっ。

いかんいかん、神様なんだから、絶対ダメね。

邪念を追いつ出して、私は母に出かけることを告げ、『異世界への扉』を開けた。

行き先はケーキ屋『銀の槌』だ。

「うーん。時空神様と雨の女神様は、ショートケーキがいいかな？ 右の神様にはプリン。いや、

同じじゃないと、泣いちゃうかな？ うーん」

悩んで、結局ロールケーキにした。あとは始祖神様や他の神様にお土産をいろいろ選ぶ。本当はホールケーキが良かったけど、なかった。なので、大人の神様用にショートケーキ、アーモンドタルト、カシスのムース、オレンジタルト、ブルーベリーケーキ、ちよつと小さめのラム酒の入ったラムレーズン入りの抹茶ケーキ。小さな三つ子の神様用のお土産は、チーズケーキとプリンを三個

ずつ。ケンカしないようにね。

お支払いをして、合計三つのケーキ箱が入ったビニール袋を持って出る。あ、溜まってるポイントカード、使うの忘れてた。ふふふ、もう三枚目だ。次は二千円引きだ。

ルームに戻ると、神様達は食事の最中だ。

「ほら、そんなに急いで食べなくても、取りはしないから」

「よく噛んで」

時空神様と雨の女神様が、右の魔法神様のお世話をしている。当の右の魔法神様は、口の周りをカレーまみれにして、次々にスプーンを運んでいる。あらら、服にカレーが落ちている。

「いやっ、自分で食べるっ」

あはは、かわいか。でも、毎日これだと大変だ。三つ子なら、余計に大変だあ。しかも、神様の成長って一律じゃないらしいし。

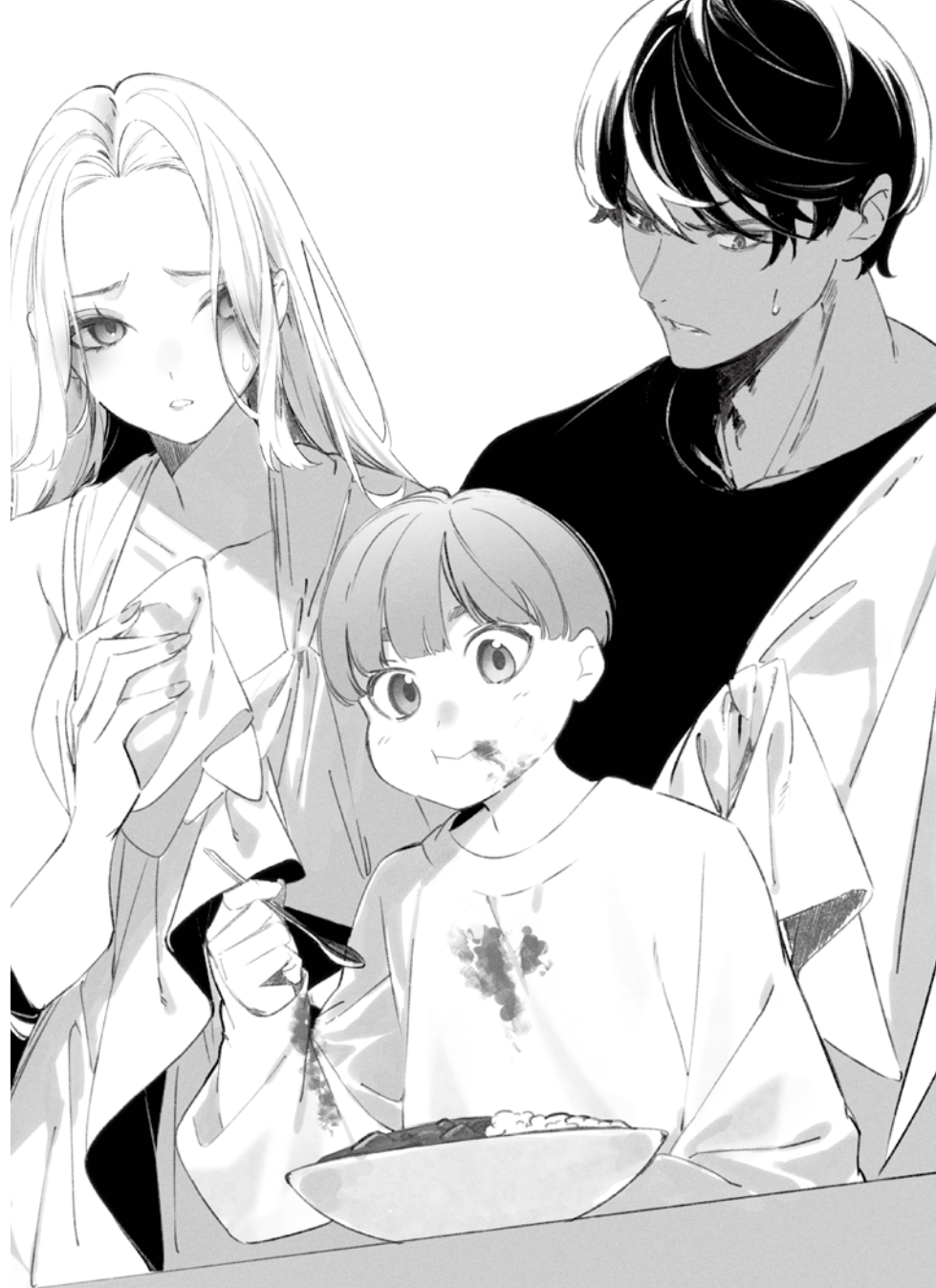
大人しく伏せているビアンカとルージュが、ギラギラした目で見上げてくる。あ、ケーキの箱ね。「神様のやけんね」

『むいっ』

仕方ない、我慢する、しゅーん、みたいな顔。あははははん、かわいかあ。こんなにおっきいの、この顔、反則よ。あとでもう一回銀の槌に行こう。

ダイニングキッチンに入り、ロールケーキを切って、皿に並べる。リンゴジュースも準備。

右の魔法神様は四苦八苦しながら甘口カレーを食べて、時空神様と雨の女神様はお世話の間に隙



を見て食べている。

やっと落ち着いたのを見計らって、ロールケーキを出すと、まあ、右の魔法神様の食いつきのいいこと。クリーム付いてますがな。母がニコニコしながら、ティッシュを渡している。花がくんくん、ひゃんひゃん。

最後の一口になって、右の魔法神様がピタリと動きを止める。ん？ お腹いっぱいかな？

「左と真ん中に、持って帰る」

いい子やつ。あと一口しかなかけど、よく思い出せたねっ。いい子やつ。

「大丈夫ですよ、右の魔法神様、お土産^{みやげ}がありますからね、食べて大丈夫ですよ」

ぱつと笑顔が咲く。あははははん、かわいいああ。最後の一口をべろり。リンゴジュースもごくごく飲み干す。

「すまん、本当に」

時空神様がすまなそうな顔で言ってくる。

「いいえ、お気になさらないでください」

なんて話していると、右の魔法神様が、再び母にしがみつく。

「どうしたね」

メロメロになっている母。

「あれ、うんとね、たべたい、また、たべたい」

ジャンプジャンプしながら訴える。かわいいかねえ。

「よかよ」

母、陥落。

ケーキの箱の中身を説明。

いざ、帰る頃になると、魔のいやいやが始まる。ダイニングキッチンをチョロチョロ逃げ回る右の魔法神様を、時空神様が抱えるが、右の魔法神様はじたばた暴れる。

「いやいやいやいやいやあああつ」

高音のいやいや発動。

「もう帰るぞ、始祖神様が心配するからな」

「いやいやあああつ」

「右の魔法神、帰らないと、この箱は開けられないわよ」

雨の女神様がケーキの箱を見せる。

「いやいやつ、いやいやつ」

「もう、なにがしたいんだよ……」

時空神様がため息。お疲れさまです。

「右の魔法神、ちゃんと挨拶しろ。あれだけご馳走になったんだぞ。お前が来たいって言うから来たんだからな。ほら、なんて言うんだ？」

「……………バイバイ」

よく言えましたっ。

「はい、右の魔法神様、また来てくださいね」

私が笑顔で答える。母も父も昇太も笑顔だ。

右の魔法神様が、時空神様の耳元でなにか話し、床に下ろしてもらう。どうしたのかな？

右の魔法神様はパタパタと走り、ダイニングキッチンの境目でじっとしていたビアンカとルージュのもとに。あ、ビアンカとルージュの顔が固くなる。緊張しているんだ。耳がピクピクしている。

右の魔法神様は、ビアンカとルージュを見比べて、ルージュの鼻をぽんつと触った。

くわつ、と赤い目を見開くルージュ。背中が毛が、ぶわつと立つ。なんだ、なんだ？ え、ルー

ジュ、大丈夫？

「あの右の魔法神様？ なにを？」

「右の魔法神は、あのクリムゾンジャガーに一時的なブーストを与えたんだ」

時空神様が答えてくれる。え、なにそれ、嫌な予感。

「ブースト？」

「支援魔法と一緒に。ただ、神の支援だからな、人が使う支援魔法とはわけが違う。このクリムゾンジャガーは、まずまずのレベルだから、振り回されずに有効に使えるだろう」

「あの、ルージュの体調が悪くなったりしません？」

「大丈夫だ。一瞬体が熱くなるだけだ。効果期間は約一年だな」

わーお、ただでさえ強いのに、更に強い状態が一年も続くの？ 嫌な予感がひしひしとしてきた。

散歩——すなわち狩りに行きたいって言いそう。

『ありがとうございます。右の魔法神様』

ルージュがいつもの顔に戻り、お礼を言っている。

右の魔法神様は、時空神様にぴったりくっついて、顔を隠す。かわいかけど、なんか、余計なことをしてくれてないよね？ 神様に対して申し訳ないけど、そう思ってしまう。

「じゃあ、邪魔したな」

「ご馳走さま、お土産をたくさんありがとう」

「……………バイバイ」

神様達が、消えていく。

うん、なんか、疲れた。

『ユイ』

静かに響くルージュの声。恐る恐る振り返ると、ルビーのような赤い目が、まさにギラギラ滾っている。

来たッ、嫌な予感ッ。

『狩りに行きたいわ』

散歩じゃなくて、ダイレクトに来たッ。

てってれってー。

【時空神 雨の女神 右の魔法神 降臨確認 ボーナスポイント60000 追加されます】

『ずるいのです、ルージュばかり』

ビアンカがぶーぶー言う。

「まあまあ、落ち着きいって」

狩り狩りと繰り返すルージュを仕方なく送り出した。暗くなりかけているから、心配だったけど。念のためビアンカには残ってもらおう。ルージュはルンルンで駆けていった。大丈夫かなあ？ いろんな意味で。

「ほら、入ろうや」

『ずるいのです、私も神様のブーストが欲しいのです』

「十分強かろうもん」

ぶーぶー言うビアンカとルームに入る。

緑——ゴブリンの巣だって、あつという間に壊滅させたやん。

『私はまだまだなのです。兄にも勝てないですし、母様の足元にも及ばないのです』

「そうなん？ お母さんもフォレストガーディアンウルフよね？ どれだけ強いのか？」

『ドラゴンも母様に睨まれたら、尻尾を巻いて逃げるのです』

「わーお」

どんだけやね、ビアンカのお母さん。

ルームに入ったビアンカの足を拭く。相変わらず、すごか爪。

「そうだ、ビアンカ。ご両親は元気なの？」

拭きながら気になっていたことを聞く。

『父は早くに死んだのです。もともと高齢だったのです。母様は姿を消したのです。私達が独り立ちした時に、旅に出たのです』

え？

「お母さんも亡くなったの？」

『違うのです、契約していたマスターとの約束を果たすために、原始のダンジョンに向かったのです』

「へえ、あら？ 確か、主人さんは異世界からの召喚勇者よね？ もういないんじゃないの？」

『そうなのですが。詳しくは聞いていないのですが、母はそう言っていないかったのです』

「そうなん。挨拶に行ったほうがいいかね？」

『原始のダンジョンの場所は、私はわからないのです』

「なら、無理やね」

仕方なか。

ルージュが帰ってくるまで、一日の締めであるビアンカのブラッシングだ。ルージュは帰ってきてから。家族総出でブラッシング。ビアンカは毛足が長いし、大きいから一苦労だ。ルージュは絨毯^{じゅうたん}みたいな毛だから、猫ブラシで早く終わる。たまに肉球を揉み揉みして、爪が更に出てくるのを、

にまにましながら見るのが楽しい。ノワールもブラッシングをする。そのままでは届かないので脚立が必要だ。ブラッシングの合間に、私達も順番にお風呂に入る。

最後に私がお風呂を出る。どうやらルージュが帰ってきたようだ。

周囲に誰もいないので、パジャマ姿で出る。

「お帰り、ルージュ、怪我はない、だあああああッ、ヘビーツ」

ルージュが啜^{くづ}えて引きずってきたのは、黒っぽい斑模様^{まだら}の蛇。頭が二つもあるよ、おかしいよ。しかも、胴回りの太かこと。あわわわわわわわ。

どしん、と置くルージュ。

『動き足りないわ』

「本当になんば言いようかと？ とにかく入りたい、今日はこれまでよ」

私は晁太を呼んで、蛇をアイテムボックスに入れてもらう。晁太は嫌がったけどね。

液晶画面にある『従魔の足拭き』を使う。ちよつと外に出たくらいなら、私達が足を拭いているけど、今回は魔物の血とかも付いていそうだし、私もお風呂上がりだし。

液晶画面のやつを使うと、お金がかかる。従魔の足拭きは一回二百G^{ゴールド}だけど、一日に多い時は十回くらい使う。従魔の部屋や厩舎^{きうしや}、中庭の清掃は一回千G。一日約十回使用する。薬交換^{わが}一日一回、五百G。爪切りが一回五千G、馬蹄交換^{ばてい}が一回二万G、それぞれ月二回。月三十日で計算すると、四十万Gはかかる。あとはシャンプーだ。二ヶ月に一回三百万G。年間二千万Gを超す。これで元氣達が大きくなったら、もつとかかる。そのうちに壁や床のリフォームも必要になるし、従魔

の部屋だって拡大が必要だ。拡大については『ルーム』のスキルレベルが上がれば、なんとかかなり
そうだから、レベルアップも頑張らないと。

しかし、時空神様からいただいたスキル『ルーム』には本当に感謝だ。

『ユイ、ユイ』

「なんね？」

ルームに入ると、ルージュが私にすり寄ってくる。

『次の街には、ダンジョンがあったわね？』

「そうやね。冷蔵庫ダンジョンって言ってたね」

嫌な予感。

「行かんよ」

先に釘を刺す。

びっくり、みたいな顔をするルージュ。

『なんで？』

「なんでって、よくわからんダンジョンに、いきなり行かんよ。行っている間、コハクやヒスイの
お乳はどうするん？」

『ユイも一緒でしょ？ ルームにコハク達を入れていけばいいわ』

「私も行くん？ 嫌ばい」

なんか、土まみれになりそうだから、絶対嫌や。それに狭いし、暗いし、不衛生だろうしね。絶

対嫌や。

『ユイ、私も行きたいのです』

「ビアンカまで、なんば言いようと、嫌よ」

行きたい、嫌や、の攻防。

おねだりビームが来たけど、私は屈しない。鋼^{はがね}の意志よ。

「なあ、姉ちゃん」

やりとりを見ていた晃太が口を開く。

「なんね」

「ダンジョン行ったら？ レベル上がるんやない？」

「張り倒すよ、あんた」

目的はわかっているんやからね。『異世界メニュー』に新しい店を追加したいんやろ。『松太郎^{まつたろう}』
のネギゴマラーメンと、『八陣^{はちじん}』にある、おさしみに納豆と卵黄がのった花火納豆が目的でし
うが。

「そろそろ中華も食べたかね」

「そやなあ、麻婆豆腐^{マボドフ}食べたかなあ」

母と父まで。

『中華とはなんなのですか？』

『気になるわ』

ビアンカとルージュが鼻息荒く迫ってくる。收拾がつかない。

「はいはい。とりあえずおしまいよ、とにかくマーファで、ダンジョンのことを詳しく聞いてからどうするか決めるけんね」

私は無理やり話を終わらせた。

次の日。

マーファには昼前に到着。

マーファは円形の街だ。城壁でぐるりと囲まれていて、城壁の外には豊かな畑が広がる。食料事情がいいって、このことね。街の中央には、ちよつといびつだけど、ビルのような建物がある。あれが冷蔵庫ダンジョンかな？

門の前で一時停車。馭者^{ぎよしゃ}台から、滑るよう^なにして降りる。馬車の中には、両親と花、元氣達がいる。

門の前には警備の人がずらりと並んでいた。彼らの視線の先は、ビアンカとルージュだ。門から中年の男性が出てくる。

大丈夫かな？

『大丈夫よ、ユイ。敵意はないわ』

「そうね、ありがとうルージュ」

小さくお礼を言う。

「テイマーのミズサワさんと、ご家族で、よろしいですか？」

「あ、はい。なんで私達のことを？」

「アルブレンから通達が来ております。ようこそマーファへ
会釈^{えいせき}する男性。」

「わざわざご丁寧にありがとうございます」

アルブレンのギルドが連絡してくれたのかな。とにかく助かる。変にいろいろ聞かれたら、言わないほうがいいこともぼろつとこぼしそうだし。

「これは通例となっていますので、皆さんのギルドカードを拝見しても？」

「はい、どうぞ」

私と晃太が冒険者ギルドカードを提示。両親は晃太が扶養にしているため、両親の身分証も兼ねている。

馬車から両親達も降り、説明。元氣とコハクが飛び出してきて走り回る。

「はい、確認しました。ご存じだと思いますが、街中での従魔のトラブルは、主人の責任となりますので、お気をつけください」

「はい」

「では、お通りください」

元氣とコハクを回収し、なんのトラブルもなく通過。良かった良かった。宿の案内所の場所も聞いたし、まず、本日の宿探しや。

ノワールにゆっくり歩いてもらう。

アルブレンと同様、いろんな視線が向けられるけど仕方ない。いちいち気にしてられない。ピアンカとルージュは堂々と胸を張り歩いている。

マーファは、さすがに大国ユリアレーナの第二都市。石畳の道の両側には、三階建て以上の建物が並び、人の往来も多い。

『ユイ、近づいてくるわ』

ゆっくり進んでいると、ルージュが顔を上げて伝えてきた。

「え、誰？」

『雄よ。以前、ユイを探しに来たうちの一匹ね』

雄って。私を探しに来た男性のうちの一人ね。心当たりは一人。私は駈者台ぎょしゃだいで、あたりを見回す。一人の男性が人混みから手を振って出てきた。

「ミズサワさんっ」

「シュタインさん」

冒険者パーティ『山風』やまかぜの火魔法剣士のシュタインさんだ。以前、馬車での移動で、しばらく一緒に行動していたのだ。

「お久しぶりです、シュタインさん」

「マーファに来てくれたんですね」

そう言っシュタインさんは嬉しそうに笑う。晃太も挨拶する。

「ウルフが見えたから。まさかと思っていましたけど」

「さっき到着したばかりなんですよ」

邪魔にならないように馬車を路肩に止める。

「今日は鎧よろいを着てないんですね」

そう、今日のシュタインさんは軽装だ。シャツとズボン、ごつめのベルトとブーツのみ。ベルトには小型のナイフとポーチ。

「昨日までダンジョンに潜もぐっていたんです。リーダーが明日まで休みにしてくれて」

ダンジョンという言葉に、ルージュが反応。

『ユイ、ユイ、ダンジョンのことを聞いて』

「はいはい、ちよっと待ってん」

そう言っているのに、ルージュはシュタインさんに近づいていく。引くシュタインさん。

『ダンジョン、ダンジョン』

「ルージュ、ストップストップ」

『ダンジョン、ダンジョン』

「やめてっば、もう。すみません」

「いえ、いいですけど。なんと言っているんですか？」

「ダンジョンのことを聞いて、と」

「ダンジョン？ 冷蔵庫ダンジョンですか？」

それから、両親も馬車から降りてきて挨拶。シュタインさんと宿の案内所まで一緒に移動しながら話をする。

「ルージュがダンジョンに行きたいって聞かなくて」

「そうですか。俺のわかる範囲でよければ教えますよ」

『聞いてッ、ダンジョン聞いてッ』

『私も潜^{もぐ}りたいのです』

迫らんでって。

「お願いできますか？ ビアンカ、ルージュ、言つとくけど、今日はダンジョンの説明を聞くだけよ。行かんけんね」

『『ぶーぶー』』

「夕ご飯、削るよ」

『我慢するのです』

『我慢するわ』

現金やね。

宿の案内所で一軒家タイプの宿があるか聞く。

入口から覗き込むビアンカとルージュに、案内所の人が顔をひきつらせた。

「ええ、と。少々お待ちを。——今は中型の庭付きなら空気がございます。一泊八万五千Gです。ただ一週間後に予約が入っていますので、それ以降はまた別の宿を探していただくことになり

ます」

「それで構いません。あの、その時にまたこちらに伺ってもよろしいですか？」

「はい、お待ちしております。こちらの木札をお持ちください。今、案内の者を」

「はい」

若い男性が案内してくれる。シュタインさんも一緒に移動。ビアンカとルージュが聞きたい聞きたいと連呼するので。

案内人は一軒家を管理する宿の人とボタンタッチ。料金は前払い。宿の人も若い男性。ビアンカとルージュに引いている。

まずまず広い庭付きの平屋に案内される。

「なにかありましたら、宿の管理棟までお越しください」

「ありがとうございます」

元氣達が庭を走り回る。ノワールものんびりしている。馬車は晃太のアイテムボックスへ。

平屋の中は広い居間と、ダイニングにミニキッチン。奥に広めの寝室が二つ。一回り小さな寝室二つ。洗面所にシャワーブース、浴室もある。庭には、テーブルと椅子が二脚。魔道具も揃っている。

「すみません、シュタインさん、お休みなのに」

「構いませんよ」

シュタインさんに居間のソファで待ってもらい、私は寝室でルームのドアを開ける。

液晶画面を操作。

よし、『CAFÉ & SANDWICH 蒼空』にしよう。ナッツとキャラメルのケーキ。セットのドリンクは、コーヒーが美味しいのだけど、こちらでは見たことないから出さないほうが良さそう。ちよつと暑いからアイスティーにしよう。

タップ。

ボワン、とケーキセットがダイニングテーブルの上に出る。『異世界のメニュー』のいいところは、器を出さなくてもいいことだ。出てきたケーキとアイスティーのグラスをお盆に載せる。私達は麦茶だ。こぼさないように気をつつつつルームを出る。

「お待たせしました。どうぞシュタインさん」

「あ、ありがとうございます。これ氷ですよ、いいんですか？ いただいても」

氷はこの世界のこの時期は貴重品だが、私達はルームに冷蔵庫があるので簡単に手に入る。

「はい、どうぞどうぞ」

ビアンカとルージュがケーキを狙って迫りそうなので、ダメよ、と牽制。ただ、花だけは、シュタインさんの膝にすがりつく。

「おわつ、と」

「すみません」

母が花を抱えて、庭に出る。父も元氣達のおもちゃを持ち、続く。

「騒がしくてすみません」

「いいえ、いただきます」

シュタインさんがアイスティーを一口。

「んっ、この紅茶、すごく美味しいですね。香りもすごくいいです」

「そ、そうです？」

私は淹れてないけどね。シュタインさんはケーキも一口。

「これ、すごく旨いです。甘いのにちよつとほろ苦くて。ふふ、マアデンとハジェルが聞いたら、羨ましがらるだろうな」

「皆さん、お元氣ですか？」

「ええ、とつても。あの二人、ミズサワさんの飯がまた食べたいっていつも言ってます」

「母が聞いたら喜びます」

よく見たら、シュタインさん、結構イケメンさんだね。時空神様ほどではないけど。あの人はイケメンじゃなくて、イケメンだからね。

楽しくおしゃべりしていると、私の頬にルージュが鼻面を押しつけてくる。

『ユイ、ユイ、ダンジョンダンジョン』

「はいはい。シュタインさん、すみませんが、ダンジョンについて教えていただけます？」

「あ、そうでしたね」

ダンジョン。それは生きた魔物。心臓部のコアを破壊しなければ、ずっと生き続ける魔物。ただ、マーフアの冷蔵庫ダンジョンのように、人と共存しているダンジョンが多く、そのためダンジョン

のそばには街が多い。

ダンジョンにもレベルがある。初心者向けや、この街の冷蔵庫ダンジョンのように中堅〜上級者向けなど。中には悪質なものもあり、そういったダンジョンは入口を封鎖。そうすると、ダンジョンはやがて餓死する。ダンジョンの栄養は外から来た生き物——つまり冒険者だ。それだけでなく、自身の中で生まれた魔物の死骸までも栄養にするため、中には何百年も存在しているものもある。ちなみに野良のダンジョンはあまりない。生まれてすぐのダンジョンは弱く、いくつもの階層でできる前にほとんどが餓死し、ただの洞穴になるらしい。つまりダンジョンは冒険者に来てもらわないと生きていけないのだ。そのため、冒険者をおびき寄せる手段が必要になる。それが宝箱だ。

基本的にダンジョンは、見た目からは想像できないくらい広い。ダンジョンの中には穴蔵や草原、岩山、砂漠、遺跡、火山、森林、海、沼地など様々なフィールドがある。大体は階層で異なるフィールドを持つ、複合タイプらしい。

各階には安全地帯がある。複数あることもあれば、たまにないこともある。

そして、ダンジョンの最大の目玉は、ボス部屋だ。ボス部屋に入ると、中の魔物を殲滅しなければ、前にも後ろにも進めない。ボス部屋の魔物を殲滅すると、復活するまで時間がかかる。その間は素通り可能。先に進みたいパーティはその間に素通りする。ボス部屋に挑戦したい冒険者は復活するまで待つて挑む。複数のパーティがいる時は、きちんと順番を待つ。このあたりにいくつかの決まり事がある。まず、他のパーティの戦闘中に横槍を入れない、殲滅したパーティの了承得ずにボス部屋の宝箱を持つていけない、並んでいるのに無視して先にボス部屋に入らない。

ボス部屋は中の魔物を殲滅したあと、必ず宝箱が出る。中身はボスのレベルや出てきた魔物の数によって変わるが、基本的にはかなりいいものが入っており、ほとんどの冒険者はこれを狙う。ボス部屋で不思議なのは、先にある階層から戻ると、魔物が出ず、部屋の中が空なことだ。

ダンジョンに挑む際に大切なのは、食料。一階は子供でも入れるが、その先に進む場合は、基本的に日数を決めて挑む。これをダンジョンに潜るといふ。中には安全地帯——セーフティゾーンで水が湧き出ているところもあるが、そうじゃないところもある。ある程度稼ぎたいなら一定期間潜るのが一般的なため、水を含めた食料が必要になる。

「とにかく、食料が重要です。あと、命は一人一つしかありませんからね」

「なるほど」

ルームがあるから、私達は大丈夫だけど、冒険者の皆さんは大変だ。

「冷蔵庫ダンジョンは二十四階まであります。二階から十階までは初心者や中堅が挑みます。十一階からは中堅以上ですね。十八階からは上級者向けになります。各階にセーフティゾーンとボス部屋があります。脱出用の魔法陣も十階、十五階、二十階、二十四階にあります」
ふむふむ。

『ユイ、ユイ、明日からダンジョン？』

ルームが爛々とした目で訴えてくる。

「なんば言いようと。ダメよ、何日潜るか決めて食料準備せんといかんやろ？」

『ルームがあるわ』

「お母さん達のたい。それにあの蛇だつて、冒険者ギルドに出さんと」
私達の会話を聞いて、シュタインさんが首を傾げる。

「蛇？」

「はい、昨日、ルージュが狩ってきて。晃太のアイテムボックスの中に入れてあるんです」
「なら、今からギルドに行きましようか？ 案内しますよ」

土地勘のない、私達にはありがたい申し出だ。特に私は地図が読めない。

シュタインさんの申し出に甘えることに。ミニキッチンをチェックしていた母に声をかける。

「お母さん、ギルドに行ってくるね」

「よかよ。あ、パーカーさんのお店の場所も確認しといて。明日挨拶に行かんと」
「わかった」

パーカーさんは旅の途中で一緒になった行商人だ。今はこのマーファの街にある自分の店に戻っているはず。

シュタインさんと私と晃太、ビアンカとルージュで出かける。出る前にルージュがお馴染み魔法のカーテンを展開。これは闇の高位防衛魔法らしい。侵入者を防ぐし、内側の声も漏れない。

「な、なんの魔法ですか？」

驚いたシュタインさんが聞いてくる。

「闇の魔法らしいですよ。私も仕組みはわかりませんが」

確か魔法使いのチェーロさんがそう言っていた。私にはよくわからないけど。

そうですか、とシュタインさんもよくわかっていない様子ながらも、なんとなく納得。

「俺、火魔法は使えますが独学なんで、他の魔法はからきしなんです」

「使えるだけですごいですよ」

しゃべりながらギルドに向かう。

ビアンカとルージュがついてきているので、当然のようにざわざわされた。

ギルドはアルブレンのものより大きい。

冒険者ギルドの買い取り窓口に向かう。

「すみません、従魔が大きな蛇を捕りまして」

中年の女性がスマイルで対応してくれる。

私達のことはアルブレンから連絡が来ているのか、落ち着いた対応だ。

「こちらに出せますか？」

「大きいので無理かと」

「ではご案内しますので、こちらにどうぞ」

「ミズサワさん、俺も見ていいですか？」

「大丈夫ですよ」

女性職員さんに誘導されて、解体の倉庫に。

こちらの解体主任さんもおつい男性だ。

「主任、よろしいですか？」

「ん、なんだ？」

「こちらの方々が、大型の蛇を持ち込まれました」

「そうか。出してくれ」

「はい。晃太、出してん」

「ん」

示された台に、晃太が頭が二つある蛇をでーん、と出す。

騒然となる倉庫。あんまり見たくないから、私と晃太は下がる。呆然としている女性職員さんと主任さん。

「ミズサワさん、ミズサワさん。あれ、どうしたんですか？」

シュタインさんが聞いてくる。

「ルージュが捕ってきまして。私は現場を見たわけではないんですけどね」

「ミズサワ様、あの、これはどちらで？」

女性職員さんがおずおず聞いてくる。ルージュに聞くが、森の中としかわからない。

「なら、私の足でどれくらい奥？」

『五日くらいね』

私が説明すると、ほっとした空気になる。

「かなり、奥ですね」

こんな蛇が森の入口付近をうろついているなんて、確かに怖すぎる。

レベルの高い魔物は、あまり魔の森の奥から出てこないそう。人間にちよっかいかけてもめんどくさいだけだ——ビアンカとルージュ談です。

「こいつ、ダークコブラだな。頭が二つなんて初めて見たぞ」

解体主任さんが教えてくれるけど、どうでもいい。

「ミズサワ様、こちらにお願いします」

落ち着きを取り戻した女性職員さんにつれられて、カウンターに戻る。その前に、解体主任さんから「肉は？」と聞かれたが、笑顔で拒否しました。絶対いらない。

「こちらの木札をお持ちください。査定は明日の昼までには終わりますので」

「ありがとうございます」

木札を受け取る。それから私と晃太の連名で、薬草を提出。

冒険者にはランクがあり、それにより依頼をこなさなくてはならない期間が決められている。これは身分証のためだけに冒険者登録をすることを避けるためだ。私はFランクで、晃太はGランク。私が失効になるまでの期間は三ヶ月、晃太のランクでは二ヶ月。その間、一つも依頼をこなさなければギルドカードが失効になる。

うかうかしたら、忘れそうだからね。提出したら、え、みたいな顔されたけど。

報酬はホウリン草五束で五百Gだ。ちりも積もれば山となる。定期的に提出しよう。アルブレンでピクニックした時に、鑑定SSSのある父が探し出した薬草が結構あるので、小分けにして提出することにした。せっかくギルドカードを手に入れたのだから、失効させたくない。

「あの、ミズサワ様、あの蛇を提出していただいたので、次回の期限まで大丈夫ですよ」
女性職員さんが説明してくれる。

あ、そうなんだ。だが、いただきます、五百G、銅貨五枚。うふふ、重みがある。お礼を言つてギルドを出る。

『ユイ、誰か来るわ。敵意はなし、この雄と一緒にいた雄二匹ね』

だから、雄つて。

「え、誰？」

あたりを見渡すと、あ、いた。

「ミズサワさんっ」

「あ、お久しぶりです」

マアデン君、ハジェル君だ。『山嵐』のパーティーメンバー。二人とも休みのためか軽装だ。

「お久しぶりですっ」

「お久しぶりですっ」

元気だなあ。

「大きなウルフとジャガーつて聞いて」

「やっぱりミズサワさんでしたねっ」

ウキウキな二人。

「ケイコお母さん、レストラン開くんすかつ」

「おい、ハジェル」

シュタインさんが呆れたように窘める。

腕をわきわきさせる二人。微笑ましい。二人とも私の母のご飯が大好きだもんね。

それからマアデン君とハジェル君も一緒に移動。パーカーさんのお店がある西通りに行く途中に、マルシェがあるということで、案内してくれた。ギルドのすぐ近くだ。

さすが、ユリアレーナの台所。屋台がすごい。

野菜に果物、パン、木製の食器、藤製の籠、様々な日用品。そして、香ばしい匂いを漂わせる料理。

ビアンカとルージュがふらふら近づいていく。はいはい、ストップ。でもおねだりビームが飛んできて、結局いろいろ買ってしまった。ビアンカとルージュに、屋台の皆さんは引いていたが……
商売人だね、すぐに笑顔で接客してくれた。

『これも欲しいのです』

『あれも、いい匂い』

「勘弁して、もうお金ないんよ」

私と晃太の冒険者ギルドカードに入れていたお金が小銭程度になってしまった。
なら、仕方ないと諦めてくれた。

「夜になると、その場で飲食できる屋台が出るんですよ」

シュタインさんが教えてくれる。椅子とかテーブルが出るってこと？